

印刷業界の新技术情報を三美印刷がお届けするメールニュース

# sanbi-i-com (No.161)

## 紙のリサイクル (2)

### 古紙再生に歴史あり

今回は現代からいったん離れて、我が国における製紙と古紙再生の歴史を振り返ってみます。

#### 1. 日本での製紙の開始時期

紙をリサイクルして再び紙を作るには、前提として製紙技術が必要です。そこでまずは、日本での製紙はいつ頃始まったのかを調べてみましょう。

日本製紙連合会のウェブサイト内にある「[紙のあれこれ>紙の歴史>日本への伝播\(7世紀\)](#)」というページは次のように述べています。

「610年(推古18年)。高句麗の僧、曇徴(どんちょう)が墨とともに日本に製紙法を伝えたと言われてます(しかし、それ以前に紙抄きが行われていたという説もあります)」。

610年伝來說とそれ以前説があるということですが、こう書かれますと、どちらに分があるのが気になります。そこで“曇徴”を検索してみましたところ、[ウィキペディアの曇徴のページ](#)に、610年説の論拠である日本書紀の原文と以下の現代語訳が載っていました。

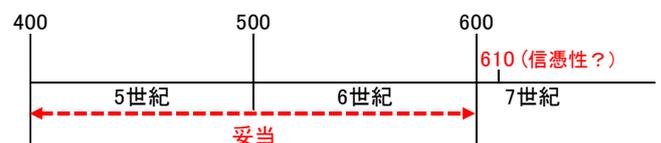
「(曇徴は) 絵の具や紙墨をよく作り、さらには碾磑(脚注によれば、てんがい、みずうす、水力を利用して穀物を挽くための臼)も作った。思うに、碾磑を作ることは、この時より始まったのだろうか。」

紙に関する記述はたったこれだけですが、注目すべきは、碾磑の始まりについてわざわざ特記しているのに、製紙の始まりについては何も言っていないこと

です。もし製紙の元祖も曇徴だったのだとすれば、この文脈で碾磑にだけ触れて紙について言及しないのは余りに不自然です。これを素直に読む限り、絵の具と紙と墨はもっと前から作られていたとしか思えません。610年伝來說はあちこちでよく目にする説なので、定説なのかと思ってしまうがちですが、その根拠とされる日本書紀自体がこのように610年説をむしろ否定しているように読めるのですから、意外にも信憑性に欠けるものでした。

別のサイトを見てみましょう。紙商社の[竹尾のサイトにも紙の歴史のページ](#)がありますが、こちらは「紙が作られるようになったのは仏教をはじめ大陸の文化や技術の交流が盛んになった5~6世紀頃だと考えられています」としています。

前述のように日本書紀は「610年(7世紀)ではなく、それ以前から」と読めますので、この5~6世紀頃というのは日本書紀とぴったり辻褄が合い、妥当な線だと思われま



#### 2. 遅くとも平安時代には古紙再生が行われていた

続いては古紙再生です。まずは日本製紙連合会の「[紙のあれこれ>紙の歴史>平安時代にはじまった紙のリサイクル](#)」のページからの引用です。

「紫式部や清少納言が活躍した平安時代。この頃には、日本で「古紙の抄き返し」という使用済みの紙

のリサイクルが行われていたとされています。」

平安時代に古紙再生が行われていたことを裏付ける史料は、六国史と呼ばれる勅撰の6つの史書の6番目である『日本三代実録』(901年完成)です。ちなみに他の5つは、古い順に日本書紀、続日本紀、日

本後紀、続日本後紀、日本文徳天皇実録です。この日本三代実録の中に「清和天皇の女御であった藤原多美子が、天皇(上皇)が崩御された後、生前に天皇から賜った“手紙を集めて紙を作り”、法華経を書き写した」というエピソードが記されています。これが史書に初めて記録された古紙再生の例です。

清和源氏のルーツとして有名な清和天皇が亡くなられたのは 880 年(9 世紀)ですので、紫式部や清少納言が活躍した 10 世紀終り～11 世紀初めからは 100 年少々前、今(2018)からだと 1100 年以上も前の

3. 古紙再生が産業として成立した江戸時代

時代は下って江戸時代ともなると、古紙再生は社会・経済に貢献する産業として成立するようになります。回収業者、古紙問屋、漉き返し業者という風に分業化され、それぞれがビジネスになっていたという点では、リサイクルのための社会の仕組み、流れは、もはや現代とほぼ似たようなものになります。

江戸時代の古紙再生を知るのにお薦めのサイトは、イラストが豊富で分かりやすい学研科学創造研究所の「落語で発見！お江戸の科学」の「第二回 紙屑屋…江戸の再生紙とリサイクル」です。

<http://www.gakken.co.jp/kagakusouken/spread/oedo/02/index.html>

以下は余談となりますが、上記ページの先の解説ページの一つ「[古紙再生\(漉き返し\)の技術](#)」の中に「浅草紙とひやかし」という以下の文章があります。ご存知の方も多いかもしれない豆知識ですが、ひやかしという言葉は紙漉きに由来するのだそうです。

「浅草紙の製造は、初期は浅草の田原町、後に山谷で多く行われた。漉き返して紙屑を煮た後に冷ます作業や、ただ紙を水に浸してやわらかくする作業を「冷やかし」と呼ぶ。その待ち時間で職人が吉原を見物したことから、物を買わずにただ見るだけの行為を「ひやかし」と呼ぶようになったといわれている。」

現在の田原町近辺に当時の名残をとどめる建物や遺構は何もありませんが、台東区教育委員会が作

出来事です。

ただし、この藤原多美子の話も、「これが紙から紙を作った“最初の”例である」と書かれている訳ではなく、古紙再生の技術や意義についても言及していません。日本三代実録の古紙再生へのこのような関心の薄さ、淡白さと、製紙自体は平安時代よりもずっと前から行われていたことを考え併せますと、多美子の時代の古紙再生は特に珍しいことではなかったのだろうと察せられます。本項の見出しを「遅くとも平安時代には・・・」としたのはこのためです。

った「紙漉町跡」というプレートがありますので、写真を撮ってきました。場所は、銀座線の田原町駅から浅草方向に向かって交差点を渡り、歩いて数十メートルの左手です。



(第 161 回: 2018 年 5 月 9 日)